問題を抱える新説が目立つ

成家 徹郎

小沢氏の大著は、天文思想や古代政治に関わる記述が非常に多い。ここではそういう分野には触れず、天文学と暦に絞って考察する。

■楚簡『競建内之』に見える日食が起こった年月日

上海博物館蔵の楚簡『競建内之』（『上海博物館蔵　戦国楚竹書』〈五〉上海古籍出版社、二〇〇五年）に日食に関する話が記されている。

隰朋と鮑叔牙従う。日既（つ）きたりて、公二大夫に問ふ。「日の食せるはなんすれぞ？」。鮑叔牙答えて曰く、「星変なり」。子（公）曰く、「斉の為……（後欠）」。（小沢書一四一頁）

隰朋と鮑叔牙はともに斉の桓公に仕えた人物で、『史記』などに記述されている。そこでここに見える日食の年月日を特定する、というのがこの章の目的である。この手順を小沢氏は四段論法で進めていく。順に説明しよう。

一．単刀直入にいえば、小沢氏は『左伝』の中にある斉公が遭遇した彗星の出現の記事（斉景公三十二年）は、本来『競建内之』に記された斉桓公の皆既日食記事が原型であった可能性が極めて高いといわなければならないとしている。（一四三頁）『春秋左伝』の「伝」には、斉景公三十二年〝斉有彗星〟という記事がある。

小沢氏はこの記事についてこう考える。「経」、「伝」では「彗星」という語が使われているところはここだけで、他はみな彗星を意味する語として「星孛」が使われている。春秋時代にはまだ彗星という語が存在しなかった。だからこの記事はおかしい。さらにこの彗星は「伝」のみにあり「経」には見えない。彗星であれば誰にも見えるはずだから、これは実は、見える場所が限定されるところの皆既日食であったとしている。

二．『競建内之』は斉公が重臣の諫言を容れて、善政を行うという話である。類似の記事は『左伝』魯昭公二十六年（斉景公三十二年）と魯定公九年（斉景公四十七年）に見える。よって『競建内之』の〝斉公〟は景公を指すと考える（一四七頁）（評者注：斉公は桓公であった可能性が高いとする第一段と矛盾する）。

三．『競建内之』に見える鮑叔牙、豎刁、易牙の記事について、時代の前後関係で、『史記』との間に齟齬が見られる（一四

小沢賢二著
中国天文学史研究

A5判　368頁
汲古書院［9450円］

七頁）。そこで小沢氏はこう考える。〝『左伝』に見える斉景公三十二年の「星変」が、本来斉桓公三十二年（魯僖公六年、前六五四年）の「星変」であった可能性を考慮しなければならない。〟（一四八頁。評者注：桓公三十二年の条、「経」にも「伝」にも天文現象に関する記述は何もない。）

四．（評者注：実際、現代の天文推算によれば、斉桓公三十二年には日食は起こっていない。）そこで小沢氏はこう言う。すでに述べたように、皆既日食は斉桓公三十二年に起こったものではないかという前提に立ち戻った場合、奇しくもこの年代はいうまでもなく斉桓公三十一年皆既日食と斉桓公三十三年金環食が起こった狭間の年代を示すものとなる。そして小沢氏は結論として『競建内之』の日食は〝これら両個のできごとを示したものであったと想定できそうである。〟と述べてしめくくる（一五一頁）。

小沢氏はその第一段階にある〝斉有彗星〟は、実は皆既日食であったと考えている。まずこの記事は「伝」に見えるものであるから、春秋の時代に彗星という語が無かったとしても、「伝」の時代には存在した。魯昭公十七年（斉景公二十三年）「経」に星孛の記事がある。これに対する「伝」では〝彗〟という語を使っている。だからこの彗星記事を疑う理由は無い。

「経」には記録されていないから皆既日食であったと判断するのもおかしい。彗星は、相当明るいものであったならたしかにどこでも見える。しかしあまり目立たない程度の明るさだったなら、星座に詳しい人だけが気付くのである。この彗星は「経」の著者には気付かない程度の明るさだったのである。

小沢氏も認めているように、『競建内之』の記事は、人物や事件の時間的前後関係において事実と異なっている（参照：谷中信一訳注『競建内之』『出土文献と秦楚文化』第四号、二〇〇九年）。

『競建内之』は当時において、どこまでも教訓説話として価値があったのである。だから著名な人物を登場させて、日食現象を持ち出して教訓や諫言を述べたものである。歴史的事実と合わないところがあっても不都合なことは何も無い。小沢氏はなんとか実際の日食現象と結びつけようと苦心した。しかしこの論法には矛盾があるので、通用しないであろう。

■殷代の暦

小沢書は一一八頁でこう述べている。

〝殷人が太陽を「辰」とし、「辰（東南東）」の方位から日出した冬至の太陽を東へ移動しはじめる年初の啓示ととらえたことは総論で既述した。これが「十二辰」の来源であり、殷の暦も「冬至年初」であったことを示唆するものである。〟

これは明らかに間違っている。殷代（商代）の歴史を考えるにはまず殷墟甲骨文を読まなくてはならない。評者は拙作「大火暦（アンタレス・カレンダー）――三正以前の暦」（『中国古代の天文と暦』大東文化大学人文科学研究所、二〇〇六年）の中で、甲骨文に見える月名と農業気象の関係について考察し、農作業（春耕）開始は当時の〝正月〟であった事実を明らかにした。甲骨学者はみなこの事実を

知っている。評者はこの状況に対して天文学的に考察を進め、当時はアンタレス（大火）を指標とする暦を使っていたことを論証した。この暦を島邦男は「大火暦」と命名した。いま中国人研究者は「火暦」と呼んでいる。

大火暦発見の経緯はちょっと長い歴史を持っている。新城新蔵は一九二八年に出版された『こよみと天文』（弘文堂書房）の中で、暦と関連する龍に着目した。さすが新城氏である。『周易』「乾卦」の主役である龍は天上の龍であり、古代の暦と関連があることに気付いていた（同書一九八頁以下）。古代中国における大火の意味について新城氏は指摘した。

新城氏はまず暦の始まりについてこう述べた。

紀元前二三千年前に始まった古代文明は世界中どこでもみな農業文明であった。そこでは農業暦を作るために目立つ恒星を利用した。エジプトではシリウス、バビロンではカペラ、そして中国ではアンタレス（中国古名「大火」）に着目したという。

大火について彼はこう説明した。

〝大火といふのは、夏の夕方に南中する赤色の一等星で、今日も名称は、さそりアルファと称するものである。目立って赤いので、火又は大火と称へられ、それが日没直後に南中するのを以て夏の真中、五月の標準として居ったものである。此星は長き殷の時代を通じて標準の辰として用いられて居ったがために、遂に辰の名を独占し、辰といへば直ちに大火を指す程になったものと見える。〟（同書二〇一、二〇二頁）

また新城氏は、天上の龍は大火（アンタレス、心宿の主星）を中心とした巨大な星座で、中国における龍の起源はここにある、と考えた。

新城氏はまた同年に出版された『東洋天文学史研究』（弘文堂書房）の中でも周暦以前の暦を推測している。

〝『春秋』の劈頭第一に「春王正月」とあるが、この正月は如何なる季節に相当するかが古来問題とされている。［中略］冬至を含む月を春と称するは頗る不穏当には非るか。〟（同書二三二頁）さらに同書二四二―二四三頁でこう述べている。

〝今何等の予断もなく、偏執もなく、平淡にこの一句を解釈すれば、王の正月といふ以上は周の王室より頒ちたる暦によれる正月と見るのが当然であらう。［中略］又正月が事実冬至月である場合にもなほ常に正二三の三カ月に春の字を冠せしめて居るのは、正二三が当然春であるべき筈と考へられて居ったことを示すものであらう。〟

「春王正月」という表現に疑問を抱いたところはさすがである。これは青銅器銘文によく見る「王某年」ではない。「王の正月」と言うからは、王朝の暦（周暦）でない暦も当時広く使われていた事実を如実に意味しているのである。民間暦つまり大火暦と周王朝の暦、二つの暦が使われていたのである。

新城新蔵の二書『東洋天文学史研究』、『こよみと天文』を見ると、彼は、古代中国で大火（アンタレス）を指標とする暦が使われていたと考えていたことが分かる。しかし、それを具体的に復原できるとは夢にも思わなかった。また、『詩経』

諸篇に記録された古い暦に関する記述に気付くこともなかったようだ。だからこの時期は「大火暦発見の前夜」と言ってよいだろう。

なお、小沢氏は新城氏の著作をかなり熱心に読んだにもかかわらず、これらの指摘に対して何ら考慮することがなかった。虚心に考えるという姿勢が欠けていたからであろう。

■島邦男の大火暦発見

大火暦という暦の内容について具体的考察が始まったのは、新城氏から五十年近くも経ってからである。島邦男は一九七一年に出版された『五行思想と礼記月令の研究』（汲古書院）の中で、主に『詩経』「七月」に見える月名と季節天象の対応関係に着目して、大火暦の存在を確認した。彼の考察は非常に細密な方法であり、これによって大火暦は論証されたと断言してよい。

評者はまた島氏とは別のやり方で大火暦を論証した。まず甲骨卜辞に見える農業や気象の記録と月名との間の対応関係に着目し、当時の正月（卜辞に見える〝正月〟）ころが春で農作業開始の季節であったことを確認した。そして、殷墟時代は西暦の四月ころが正月であったことを天文学的に証明した（『中国古代の天文と暦』。島氏の研究についてもこの著書のなかで分かり易く紹介した）。

拙作で書き漏らしたことをここに追記する。

『春秋』の桓公五年経文に〝大雩す〟とある。雩は雨乞いの儀式である。

これに対して『左伝』はこう説明している。

〝秋、大雩スとは、時期外れであることを記録したのである。凡例。祀りは、啓蟄になれば郊祭、竜星が現われれば雩祭、粛殺の陰気が生ずれば嘗祭、閉蟄になれば蒸祭を挙行する。時期を外れて挙行された時は記録する。〟（岩波文庫版『春秋左氏伝』上冊七五―七六頁）

〝竜星が現われれば雩祭〟の意味は、拙作『中国古代の天文と暦』によって明瞭である。春、雨が降るのを待って種まきを行うのである。雨が降らなければ種まきはできない。

また『左伝』荘公二十九年の条にこういう伝承が記録されている。

〝土木工事は、竜星が暁方に東方に現われる頃、農事を終えて準備にかかる。ついで大火星が現われる頃、工作の道具を現場に運ぶ。〟（岩波文庫版上冊一五五頁）

この伝承によっても、民間では、大火を日常生活の中の活動時期を知る目印としていたことがよく分かる。

紙数の都合で、ここでは初稿の三分の一以下に短縮して発表した。小沢書は多くの問題を抱えている。別の場で多くのテーマについて検討したい。

学術的論争は、学術研究の発展にとって有益だと思う。批判のみで讃辞の無い書評になった。評者としては、これを機に古代天文学に関する学術的論争が盛んになり、この分野の研究が一層進展することを願っている。

（なりけ・てつろう　大東文化大学）